



オペラ
バイエルン州立歌劇場
の《ロベルト・デヴリ
ュー》

ウィーン国立歌劇場日本公演の演目の1つになっているこの《ロベルト・デヴリュー》だが、偶然、ウィーン・フィルのキュッヒルがコンマスを務め、「日本公演のリハーサルになる」と、指揮のハイダーも喜んでいった。題名役のサッカも急病ということで、ピザピアが呼ばれたが、代役とは思えない安定した歌唱を聴かせた。ガヴァネッリは温かい声、ベルカント的音楽性を持ちながら、どうして無防備な響きの声を出したり、声を無理に張り上げたりしてしまうのだろうか。日本でも発売されるDVDと唯一同じキャストのピラントは、今回もサラを好演していた。そして女王グルペローヴァが登場すると、客席の空気が変わる。完全に無の状態から、高音を引き出すように歌い始める、そのテクニックは不

死身だ。ドラマティックな表現も、まるで自分の人生を歌っているような錯覚を起こさせる。

演出のロイは、時代設定を現代に移動させているが、ハイダーもグルペローヴァも認めているように、成功している。グルペローヴァは、「膝丈のスカートで歌うのが大変で嫌だけれど」と言っていたが、エレガントな脚さばきまで「女王」であった。ドラマはどンドン緊迫していき、女王が「彼を生きて連れ帰った者には、王冠をあげる」などと口走る時、死刑執行の合図の大砲がなり、心理的極限を越える。最後に女王がかつらを取り、老いて薄くなった地毛が姿を表した時の視覚的効果は絶大だ。観客はこのドラマに心を捧げ、女王が倒れ、幕が下りると同時に、歓声がわき起こった。グルペローヴァがカーテンコールに登場すると、場内は総立ち、カーテンコールの回数は数えきれない。ホール係が観客を追い出すようなそぶりを見せても、その興奮を収めるには足りなかった。この光景が日本でも再現されるのであろう。 (中 東生)

